
全善の人

朋次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全善の人

【Nコード】

N6979P

【作者名】

朋次郎

【あらすじ】

ある1人の女性のお話

前編

私には2人の母がいます。

1人は産みの母そして女優。名前は神ノ前ベアズ。それも美しい澄んだ青い目をもったハーフの顔立ちで不動の人気を誇る大女優です。

・・・神ノ前ベアズ。彼女は20歳のときに私を産みました。今、私はちょうど20歳。なので彼女は現在40歳の計算になります。

でも彼女とは覚えている限りでは会ったことはありません。きっと世間では独身で通しているのも私のようなものがいては仕事に差し支えるからでしょう。

残るもう1人は育ての母、田中タケ。私が1歳になるかという時にポリオ（小児麻痺）にかかったせいで四肢が動かせない状態にいるのをここまでつききりで育ててくれた人です。このタケは私の生母、神ノ前ベアズをも育ててくれた人です。長野県の過疎の農村に生まれた人で殆ど身寄りはなく、若い時から母の実家に身を寄せて仕えてきたというから、私が生まれる前からのつきあいです。でももうこの人も80歳。でも年はとってもあいかわらず私の世話を日々、まめまめしくしてくれます。和歌山県内にあるこの小さな家にずっと2人で暮らしています。ひっそりと静かに暮らしています。・・・父親。父親はいません。タケは何も話してくれませんか、私も聞きません。私には父親はいないので。私にとって人間は、タケと神ノ前ベアズの2人だけなのです。

申し遅れました。私の名前は恩地筑音といいます。「恩地」という姓は母の本名です。私には今の今までこの名前は必要ありませんでした。不自由な身体の子で外出はしませんでしたし、日常必要なことはタケがすべてしてくれました。一時はアルバイトの女の子がきてくれたことがあります、この人たちだって名前を呼ばれることもありませんでした。なぜなら実直なタケが彼女たちに私のこ

とを「お嬢様」と呼ばせたからです。昔風のいいかたですよ。ついでにいいますと私と直接顔を合わせる機会もない商人にまでそう呼ぶように強要していたようです。1つ部屋をこえた玄関で「おじようさんはお元気ですか、」という会話が聞こえてきたことがありましたので。

私は学校へ行かなかったので友人はありません。本が友人でした。いろんな本を読みました。特に聖書が好きです。いつか教会に行ってみたと思いますでしたがタケがキリスト教を嫌うのでその願いはかなえられません。私は自分で自分の洗礼名をルルドの奇跡を聖母から与えられた少女の名からもらって「ベルナデット」と名付けてひそかに自己流の神への祈りを唱えて日々を暮らしていました。

タケは風に当たると身体に悪いからと言うので私は日頃は四方ふすまに囲まれた窓のない部屋に寝たきりでいましたが、それでもたまには日差しのやわらかな暖かい日に縁側までふとんをよせてもらってひなたぼっこをさせてもらいました。私はこれが楽しみでした。狭い庭ですが四季折々の草木が植えてあります。春はチューリップ、夏はひまわり、秋はコスモス、冬は・・・冬は縁側にすら出させてもらえませんがタケがちりと戸を開けて見せてくれると真っ白な雪景色が見えたりして私は自然の美しさに感嘆のまなざしを向けるのです。タケが米をまいたり、枝にみかんをさしてやるとやってくるスズメや野鳥、見る都度に違う山々の表情、花、空。いろいろな話が詰められている本、世界中の風景や子供たちの写真集全集。心の中を大きく占めるお母様・・・神ノ前ベアズ・・・そしてやさしい私のばあや、タケ。これらが私のすべてでした。楽しい楽しい暮らしでした。

また東の方には3年前からマンションが建っています。工事の間はその揺れと振動、騒音は私にとって耐えがたい苦しみでした。が、いざ建ちあがると縁側の窓から見える色とりどりの洗濯物や聞こえてくる人の話し声や子供たちの歓声は私の生活に新しい楽しみをく

れました。

だけどマンション建設の頃と前後してタケは縁側にいると身体に悪いからといって外の景色をみせてくれなくなりました。私はひどくがっかりしましたがたまに強くせがんで朝早い時間に出してもらうようにしました。そういえば一度だけこういうことがありました。縁側で寝て庭をみているとまだ朝の6時前なのにもう洗濯ものを干している人がいてその人は私に気付いて手をふつてくれました。3階にいる人でした。私は大層幸福な気分になり、自分も不自由な手でふつてかえそうとしましたがそばにいたタケがきつい顔をして私をふとんごと、なかの部屋に引きずりこんだのでそれはできませんでした。

それから後、タケは私がどんなに言っても外を見せてくれないようになりました。私が怒るとタケはもう80歳になったので力がでなくなりました。重たいふとんをひっぱって縁側に出すのはできない、といって泣くので強いことは言えなくなっていました。

私は本もたくさん持っていてその中の好きな本は数え切れないほどあります。絵本や写真集も好き、でも神ノ前ベアズの写真集が一番の私の宝物です。彼女は日本古来より女性に伝えられているしとやかさとひかえめさを持っていながらどんな海外にいる美人にだって出せないハツとする色香というものを持っています。テレビ・テレビですか。私はテレビもパソコンも寝ながら見たり指で操作できる便利なタイプのものもってはいますがテレビはあまり好みではありません。

彼女はあくまでも美しく気高い聖美少女であらねばいけません。テレビの画像の彼女も美しいけれどその時々の中の役の中にはいつてしまつて怒ったり泣いたりたまには男性とみだらなことをしたりしてしてしまうのです。そんな彼女を私はあまり好みません。1つだけ例外に好きな役があります。それは聖母マリア役です。5年前のお正月番組で放映された昔の日本の天草でおきたキリシタン弾圧をテ

ーマにした番組でした。それは彼女にぴったりでした。その番組だけは繰り返し繰り返し見えています。

タケはそんな私のそばを離れません。私が本を読んだり、空想したりビデオを見たりしている時でもいつでもそばにいます。そして私のお下の世話や食事の介添えをしてくれます。体力のいるおふとの替えや洗濯は住み込みの女の子がしてくれます。女の子はタケが75歳を越したころ、身体がつらいといいだしてからやとつています。タケは背中が目に見えて曲がり、足も歩くのもつらそうだったので私は心配でたまりませんでした。だから女の子がくることはうれしいことでした。

最初に来た女の子はたまよちゃんと言いました。時花たまよちゃんです。髪の毛の長いふとった女の子で18歳。私は年の近い友人ができる、家に来てくれると思うとすごくうれしかったです。が期待に反して、たまよちゃんはタケにどういいきかせられていたのか、自分から話しかけることはなく、必要な言葉しかいってくれません。私に話しかけるときは畳の上を手について「おじょうさま、これからナニナニをさせていただきます」とだけ言いました。たまよちゃんは3日しかいてくれませんでした。3日目の夜私はたまよちゃんの「やめさせてほしい」という声を聞きましたのでがっかりしました。タケが言うにはお嬢様の世話が私にはあわないといってさつさと荷物をまとめて出て行ったそうです。タケはすごく怒っていました。私には仕方がないと思いました。ただその後数日は悲しくて悲しくて食事がすすみませんでした。タケはそんな私を前に、私が他人を家に入れたのがまちがいだった。私が悪かったとあやまるのです。そうは言ってもタケは高齢です。もう一人では私の世話はできません。次々に新しい人を探さなねばいけませんでした。だけど新しい人はいずれもすぐにやめたりしてなかなかいついてくれません。ある時、私はタケにおそろおそろ神ノ前ベアズと私について質問しました。

「ねえ、タケ。あの人が私を産んだ時、喜んでくれた？」

タケはすぐに大きくうなづきました。

「もちろんですとも、おじようさま」

「私が1つのときに病気になって……。不自由な身体になっても、それでも生きているのを喜んでくれているの？本当に？」

タケは大きく目を見開き大粒の涙をこぼしはじめました。

「おじようさま、おじようさま。もちろんでございますとも。ご自分の身体に引け目を感じられますか。確かに五体満足とは言い難いですがお母様はあなたの成長を楽しみにしておられます。女優という仕事のため表立っただけは独身を通されていますが、あなたがかわいいと思っておられるからこそ日々不自由のないように仕送りをしてくださるではないですか」

私はワルイコトを聞いたと思いました。私はどういう返事を期待していたのか。タケはしゃくりあげました。

「おじようさま、くじけてはいけませんよ。あのたみよがおじようさまの世話ができなかったのは、単なるあの娘のわがままです。近頃の娘はみんなそうです。楽な仕事ばかりしたがる怠け者なのです。私自身はこうしておじようさまの世話をさせていただけるのはありがたいと思い、つらいとか、しんどいとかなど思ったこともありません。おわかりになりますよね」

私はそれで十分だった。聞かなければよかったと思いつつ後味の悪い思いでもうわかったからよい、という合図を送った。その晩もいつものようにタケに手を握ってもらいながら眠りについたが生まれて初めて将来の不安を思った。このタケがいなかったら私はどうなるのだろう。神ノ前ベアズは私をどうするのだろう……。

しばらくして澄乃ゆかりさんがきた。もう十何人か目の新しい女の子だった。いや、女の人でした。今度の子は問題ないわとタケが珍しく太鼓判を押した。ゆかりさんは30歳だった。病院の看護師をしていたが離婚したのを機にやめどこかの施設で働いていたのを家にくる出入りのクリーニング屋さんが紹介してくれたのだった。

私はゆかりさんを一目で気に入りました。運命的な出会いというものを感じました。私のそのカンは当たっていました。ゆかりさんは30歳には見えずはつらつとしていていつもニコニコとしています。髪は短く笑うと目が細く隠れてかわいい八重歯が見える。前置きなくよく話しかけられた。私が答えられなくとも彼女の方からよくしゃべってくれました。

私から話しかけると最後まで耳を近づけてウンウンと聞いてくれた。ゆかりさんが来てくれて私はうれしかった。私の下の世話もタケがやるよりウンと楽になった。タケはタケなりにやってほしい「やり方」というものがあつたようだが、ゆかりさんは自分のやり方を貫いた。やはり看護師をしていただけのことはあるようね、とタケは皮肉を言いながらもゆかりさんの言うことに耳を貸すようになった。これはとても画期的なことだった。

私とゆかりさんとの間にはすぐに友情が芽生えた。ゆかりさんと1日中いろいろな話をし、互いに教えあつた。ゆかりさんは新聞にのっているいろいろな世情や過去の仕事の話。私は自分の持っている本や写真の話。

ある時私は、私の本当の母親が神ノ前ベアズである事実も告白しました。ゆかりさんにだけは隠し事はしなくなかったです。何も知らなかったゆかりさんはびっくりしましたが「そういえば目元がそっくりだと思っていたの。すてきなお母様をお持ちでうらやましいわ」と言ってくれました。私はそんなゆかりさんを見て心からこの人が来てくれてよかったと満足しました。タケは私がゆかりさんに母のことを話したことで内密の話なのにと気を悪くしたが、ゆかりさんは口の堅い人だから大丈夫と私がタケを叱りました。

私とタケとゆかりさん。この3人がそろってから、私はまた一段と幸福になりました。

ゆかりさんは私をなんでもほめました。ほめすぎて閉口した位です。

「あなたはなんでもよく知っているのねえ、えらいわねえ」

「・・・でもこれ本で得た知識ばかりよ。私が調べたわけでもないし」「聖書の文句、よく空で言えるわね。よくそんなにも覚えられたのね」

「聖句が好きなのよ。私にとって心の宝石のように大切なものよ」「あなたはいいい人だわ、こんなにイヤミのない天使のような心の人って見たことがない。いい人よ。本当にいい人だわ」

（・・・私は恥ずかしかった）

でもゆかりさんはこんな調子で感心したように言う。だけどゆかりさんと話するのは楽しかった。ただ1つ悩みがあるとすれば、時々タケとゆかりさんの意見が食い違うことだった。

ゆかりさんが私を縁側に連れて行こうとするとタケが反対するという具合だったが、2人が一番衝突したのは、ゆかりさんが私にできるはずだと思う動作を全部自分でしなさいと言った時だった。

ごはんを食べる、1人でトイレに入って用をたす、手足を動かして運動する・・・今までみんなタケがしてくれたことだが、ゆかりさんは私にやれという。

私はあまり自信がなかったがそれでもやってみせようとするとかケが激怒した。お嬢様に何と言う無理強いを、あなたは自分がラクをしたいばかりにお嬢様に無用の苦勞をかけるのですね！

そこでゆかりさんとタケの口論が始まる。私のことで2人がケンカするのでつらかったです。それでもタケはゆかりさんの主張を一部聞き入れて私にリハビリをさせてくれた。リハビリといっても手を開いたり、握ったり指を折りまげる程度の動作だが、私には握力がないので本音をいうとかなり苦痛だったが、ゆかりさんがつきつきりで励ましてくれるのでがんばりました。

そうしてすごしているうちに日がたちました。晩秋のある日、悲しい知らせがきました。私の母、神ノ前ベアズが亡くなりました。日本人なら知らないくらいの大女優だったので新聞、テレビ、ラジ

才で報道されました。2、3日はひっきりなしに神ノ前ベアズの過去の映像が流され、通夜も葬式もテレビ中継で流されました。タケは私をゆかりさんにまかせて葬式には行ったようです。が、すぐに帰ってきて何ごともなかったように日々の仕事に戻ります。

私はといえば母が亡くなったのはショックだったが、会ったこともないので今1つピンときません。神ノ前ベアズの追悼番組で未公開フィルムをDVDにとり、私のコレクションがまた増えたなあと思っただけだった。自分が涙を流さないのが不思議だった。他の人なら母親が死ねば泣くのだろう。私の場合、縁の薄い親子だったし仕方がないと思う。まるで他人事だった。

私にとって母って何だろう。ポスターの中の神ノ前ベアズ。本のグラビアの中の神ノ前ベアズ。映像の中であでやかにほほえむ神ノ前ベアズ。彼女はいつも見えない大衆に向かってほほえんでいる。私のことはどう思っていたのだろう。人気を持続させるために子供を産んだことは内緒だ。私という子供はいないことになっている。だから会いにもこない。生活費だけは送る。彼女は私にとって何だったのだろう。私は初めて自問自答する。

私が生まれたとき、母は喜んだ、とタケは言う。そうだったのかな。でも私の存在は世間に公表してくれなかった。結果的に生後間もなく病気になる普通の女の子のように生活できなくなったので公表しなくてよかったと思っていたかもしれない。

私はと言えば母が死んでも何も変わらない。母が死んでも写真や本やテレビの中の神ノ前ベアズは生きている。一体、何が、誰が死んだというのだろう。言い換えれば神ノ前ベアズはこれ以上の新作の映画に出ないし写真集も出さないしテレビにも出ません。出演できないのでコレクションはこれ以上増えませんよ、こういう意味合いいではないか、こんなとりとめのない考えことの中で私はハッと我にかえる。

なんてヘンな考えごとをしていたのだろう。いくら私が、母としての神ノ前ベアズを知らないからといってあんなに。私は神ノ

前ベアズのお腹から生まれたただ1人の子供なのだ。なんて罰当たりな考えごとをしていたのだろう。私はそばでいつものように内職の繕いものをしているタケを見やり、心の中で母の冥福を祈った。見えぬ神の御前にて逝ってしまった縁の薄かったそしてかけがえない生母の永遠の平安を祈った。

後編

そんな風に母の喪中のつもりで日々淡々とすごしていたら、ある日2人の男女が私を訪問しにきた。ちょうど神ノ前ベアズが亡くなつてから20日目だった。女は最初にきたアルバイトの女の子のたみよちゃんだった。たみよちゃんと一緒に来た男を知り合いの新聞記者だと紹介したらしい。新聞記者というのが何を意味していたのかタケにはピンときたようです。タケは2人を部屋にあげず強い口調で、門前で追い払ったようです。

が、明後日に私の記事が出たようです。

「故神ノ前ベアズに隠し子がいた！その子はもう20歳になる娘さんだが気の毒にも寝たきりの病人であり、神ノ前ベアズのひそかな金銭の援助で田舎の片隅でひっそりと暮らしている」

そういう記事だったそうです。タケは何もいいませんでした。がゆかりさんが教えてくれました。私はその記事が見たかったのですがゆかりさんが興味本位で書いたくだらないものですからと言って見せてくれませんでした。

その記事をきっかけに私の存在、大女優神ノ前ベアズの隠し子と
言う存在・・・で世の人たちの中にさらけ出されました。

私の心境は複雑でした。自分の姿はよく知っています。寝たきりで四肢の自由がきかないこの身体は、人々の神ノ前ベアズのイメージもくすだけのものではないかと怖れました。ゆかりさんはそんなことはないといいました。が子供がいたというだけでファンをやめる人が出てはあの世に逝った神ノ前ベアズが悲しむのではないかと思います。

私はもちろん、タケやゆかりさんも、あの新聞記者に告げ口したたみよちゃんを心から恨みました。

その日からわたしのまわりは変わりました。1日中いろいろな来客がくるようになりました。手紙もいろいろなところからきました。

来客は知らない人ばかりです。体調が悪いと言って断っていますがそれでも塀の外側からときには縁側にまで人がこちらの様子をうかがう気配がします。

みんな神ノ前ベアズの遺児である私が目当てでした。私をひとめ見たいがために、私に一言しゃべらせたいがためにカメラやメモを手集まっています。タケもゆかりさんも神経をとがらせてピリピリしています。家の中は外の嵐に耐え、いつもよりも静かにひっそりと過ごしました。

皆さんは私に何を期待するのでしょうか。前にも言ったように私は神ノ前ベアズの子ではありますが、親子で語り合ったことなんてありません。もらったものはこの家と日々ためていけるだけのお金です。彼女からは手紙の一通ももらった経験もないので、私は彼女が私について何を思っていたか定かではありません。言うなれば、神ノ前ベアズの隠し子としての私に好奇の眼を向ける世間の人々に何も提供すべきモノはないのです。

私は言いようのない不安感の中で生活していました。すぐにこんな騒ぎはおさまります、というゆかりさんの言葉を信じて……。

だけど、こんなバカな騒ぎがはじまってちょうど7日目、タケが死んでしまいました。

こんなときに……こんなときにタケが死んでしまうなんて！

朝ゆかりさんが台所に入ったとき、先にいたタケが床に倒れていてすでに息はしていなかったそうです。脳卒中。あつけない死でした。私は母の死を伝え聞いた時よりもタケの死を聞いた時の方がひどいショックを受けました。

タケ！私を育ててくれた人！片時も離れず私のそばにいてくれたのに！

私の命の1片、タケがいてくれたからこそ、私の身体も生きていた。ああ、私はどうしたらいいのだろう。ショックのあまりぼんやりしていた私だったが、ゆかりさんは精一杯してくれた。葬式などに必要な「世間との折衝」はみんな彼女がしてくれた。

でもタケの葬式は私が喪主にならねばならない。私は一人で初めて人々の前に出ないといけなかった。身寄りのないはずのタケの葬式には大勢の人がきていた。多分私見たさの好奇心からきている人が大半だったのだろう。カメラを持ってきている人もいた。あきらめの心境でタケの遺影の前に寝たまま私は不自由な手をあわせ、タケの冥福を祈りそして人々の前に頭を下げる。

参列者の皆さんは神妙な顔つきでいながら、私を注視している。

一見、大人しげ、だけど心の奥底まで深く探るような視線だった。みんな、違う顔なのに、同じ目つきだった。私は手をかたく握りしめたまま、お坊さんのお経を聞いていた。そして聞きたくないのに、参列者の話も耳に入る。

・・・歩けないなんてね、寝たきりなんですってね、かわいそうにね、あれじゃあ人前に出るのを嫌がるはずね、・・・目はやっぱり青いわ。確かに神ノ前ベアズの娘だわ、よく似ているわね・・・等等。

そのひそひそ話は当の私の耳に聞こえる・・・あなた達は何を思っているのかよくわかるけれど、私は神ノ前ベアズの子でも私は私なのよ、と言いたかった。さみしい気持ちだった。早くいつもの部屋に戻りたかった。やっと葬式が終わり部屋に戻れると思ったら、フラッシュをたいて写真をとろうとする人々に出会う。ゆかりさんや葬式の手伝い人がカメラをもつ人を注意しようとしたが無駄だった。私はふとんをかぶりたかったが、それもかなわず無表情にカメラのレンズを見つめているしかなかった。悲しい葬式がやっと終わった。

2、3日ぼーとして私はなんとなく過ごしていたら来客があった。神ノ前ベアズの弁護士さんだった。ゆかりさんが応対していたがやがてにここにこしてその弁護士さんを私の部屋に連れてきた。私の部屋に人をあげるなんて、とがめようとしたが何かがおこったのだという直感でやめた。果たしていい知らせだった。母、神ノ前ベアズ

が生前したためていた遺言状により、彼女が残した全財産を私にくれるという。私はもう今後のお金に不自由をしなくてもよくなった。私は素直に心から母に感謝する。やはり母は私を思ってくれたのだ。うれしかった。タケがいてくれたらどんなに喜んだだろう。とにかく私はうれしかった。何か1つふっきれたようだった。本当に・・・。

神ノ前ベアズの遺言状が公開されると世間はまた私を取り囲もうとした。家の周りはいいかわらず人ん心配がする。厚かましくも家に入ってこようとした人もいる。ゆかりさんは今度は前よりもひどいわと憤慨した。私は余裕たつぷりに笑う。あちらもそれがお仕事なんだしそれだけお母様が偉大だったってことよ。私は神ノ前ベアズを誇りに思っている。ただ私の存在が彼女の価値を傷つけないだけが心配だわ。独身で通していたらしいから私と言う子供の存在でファンを止められた人も多いのではないかしら、心配だわ。そう答えるとゆつくりとしか言葉が伝えられない私のために耳をよせてくれたゆかりさんが怒った。

「どうしてそんなふうに考えられるのですか、私には信じられない。あなたはいない子供にされていたのよ。いくらファン対策と言ってもやりすぎだわ。私だったら耐えられない。どうしてあなたはそんなのよ」

私はさみしく笑う。

「だって私は一人では生きていけないもの。周りの人に生かされているもの。そりゃどんな人だって、生きていくためにどんな感傷ももつには自由だけど、同じ生きるなら物事をいい方に、いい方に考えてみたい・・・」

つつかえつつかえ一生懸命ゆかりさんに伝えているとおつかぶせるようにゆかりさんの声がさえぎった。

「それは敗者の論理だわ。本当に、本当にくやしくないのっ？」

敗者の論理・・・、その一言は私の耳をジーンと打ち、タケの葬式で聞いたひそひそ話と違った悲しみを私に与えた。

物事を良い方向に考えてまたすべてを神の御心のままとらえる、それが敗者の論理になりますでしょうか、それでは今の状況に怒り戦うのが勝者になりますでしょうか。現実をみても私には1人で生きていく力はありません。身体が思うように動かないし言葉だつて身体をひきしほるようにしてやつと声が出る有様です。それでも私は生きているのが大好きだし感動も感謝もする。本当に感謝している。

お米を作る、届ける、焚いてくれる、よそつて盛ってくれる、これはゆかりさん。着物を作る、売る、着るのを手伝ってもらう、これはゆかりさん、あなたね。ほうら身の回りを見回しただけでこんなに感謝しないといけない人がでてるじゃないの、こんな私にいったい何ができるでしょうか、ね、ゆかりさん。

でもゆかりさんは私の言葉を最後まで聞かず、私はそんなことはいつてないのにとどなって涙をこらえながらプイと隣室にかけこんでいった。私も涙がでたがでも流れるにまかせた。泣いたってしかたがないけれど涙が出るの・・。

しばらくしてゆかりさんはヘルパーさんを雇って2、3日留守をした。どこへ行くとも言わないので私は心配していた。あのあとすぐ仲直りしたものの、お互い気まずい気持ちだったからだ。もしゆかりさんが私のもとを去ると言い出したら私はひきとめられないし、これから先、誰を頼りに生きていったらいいかわからなくなる。私はとても不安だった。

3日目どこからか彼女が帰ってきたときはホツとした。だが彼女は男性を一人連れてきていた。男性はまだ若くてきちんとした物腰で私の方を親しげに見た。私は他人の視線が怖かったがこれから何が起るのかもつと怖かったので、ゆかりさんが何を言い出すかじつと見つめた。

ゆかりさんはいつもとおりのにこにこ顔でいつもどおりに私の手

をやさしく握って話しかけた。それは驚きべき話だった。

「あなたには仲間が必要よ」

この家をたたんでわたしのような介護が必要なもの同士が集まって共同で住んでいる施設に行こうというのだ。そこで自立の訓練を受け、いずれは独立できるように皆と共同生活をしていこう、これはあなたのためでもある。怖がる必要はない。この男性はその施設の人なの。私も一緒に看護師として勤務したこともあるので人柄は保証するわ。あなたを連れにいらしたのよ。さあ私と一緒に。

「ゆかりさん・・・」

驚きのあまり声が出ない。急でびっくりするのも無理はない、ゆかりさんは言う。この話はタケさんの存命中から言っていた。もともとタケさんはあなたを外に出したくないお考えで私の話すら聞いてもらえなかったけれど、とさみしそうに付け加えた。

「さあ、恩地築音さん、私もあなたと一緒に行く。私は今日限りあなただけの世話をやめますが、その施設でまた会える。今度は仲間としてね」

男性がそれを受けて行った。

「恩地さん、仲間はあるあなたが来るのを心待ちにしています、行きましょう」

私は恩地さんと呼ばれるのも初めてなら男性に話しかけられるのも初めてだ。まだとまどっているゆかりさんは私の手をそつと自分の両手で包み、哀願するように言った。

「恩地さん、あなたはこの年まで力ゴに入れられてきた小鳥も同然の身の上だったのよ。タケさんはあなたに不自由な思いやつらい思いをさせたくないあまりにあなたをこの部屋に閉じ込めてきた。それはやさしさでもありましたが間違ったやさしさだと私は思う。さあ、このかごの中からでましようよ。そして生きていきましょう。

私と一緒に生きましょう」

私の心中で何かがはじけた。その音は明るく澄んで聞こえた。ゆかりさんの真に私を思う眼と心が私の心の中に入り込んできた。ゆ

かりさんの思いやりが感じられよくわかったと思った。

「わかりました。すべては神の御心のままに・・・」

私はほほえんで力を振り絞ってゆかりさんの手を握り返した。ゆかりさんもほほえみそしてみるまに涙をためこぼした。ゆかりさんはあわてて涙を拭き、そばの男性にうなづいて合図をした。男性は身を起こすと素早い動作で私を抱いた。そして立った。その人は広い肩と広い胸をもち、腕はかたく身体全体が平らだった。あごにそり残したひげがあたり妙にくすずすたい感じがする。かすかな妙な煙の匂い、きつと煙草の匂いだろう。そういえば私って男性に会ったこともなかったなー、お医者さんぐらいだったか・・・。心中そうつぶやいていながら抱かれていた。部屋の外に出ると冬の寒さが身にしみるが高揚していたので寒いとは思わない。玄関が妙に明るかった。

明るい陽の光、地面には白い雪が積もっている。雪が降っていたなんて知らなかった。何もかもが明るい。まぶしい光の中で私は未来の生活に思いをはせうれいような、ちょっと怖いような気持ちを味わう。くつをはいて男は立ちあがり再び私を抱いて歩きはじめた。ゆかりさんも荷物を持ってついてきてくれる。これがカゴの外これから私は生まれ変わる。そうつぶやいて私は目をとじて深呼吸した。

・・・、ああ幸あれかし、すべては全知全能の神の御心のままに・・・

私は今まで大切にしていた神ノ前ベアズの本やその他いろいろなものを後に置いてきた。もちろん後日取りに行くつもりだったがその時は身1つだった。

私は文字通り身1つで家を出た。何となくすっきりとした気分を外へ出るというのは楽しいものであることを痛感したのです。

完

後編（後書き）

これは私が初めて書いた履歴書です。今カゴの外にいる私は過去の自分がいかに無知であつた思い出されます。タケと暮らした20年は温かく楽しい思い出ですが何も残っていないのに気付きました。このことは少し残念に思います。皆さまこんなに拙い文章を最後まで読んでいただきありがとうございました。恩地築音拝（代筆並びに題名・朋次郎）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6979p/>

全善の人

2010年12月29日14時40分発行